

# 声優ラジオのウラオモテ #02

夕陽とやすみは諦めきれない？



ドワンゴジェイピー  
オーディオブック  
限定特典

書き下ろしSS  
ブックレット！

NOT FOR SALE

『声優ラジオのウラオモテ #02 夕陽とやすみは諦めきれない？』 オーディオブック特典  
© Kou Nigatsu 2020 イラスト/さばみぞれ © KADOKAWA



「ありゃ。もうこんな時間か。どつりで外が暗いと思った」

由美子は腰に手を当てて、呟く。つられて、千佳と朝加が窓の外を見た。

外には夜の気配が漂っている。最近はずっかり、日が短くなってしまった。

「ああ本当だ。ふたりとも、ごめんね。結局、丸一日使わせちゃったね」

「いえ。一日で終わってよかったです」

朝加と千佳の会話に、由美子は思わず苦笑する。

今日は以前のお礼を兼ねて、千佳とともに朝加の部屋の清掃に来ていた。

溜まりに溜まった家事の数々は、ふたりがかりでも一筋縄ではいかなかった。

まあこれなら及第点かなー……、と思つ程度に片付いたときには、既に今の時刻。

千佳の言つとおり、「一日で終わってよかった」と思つくらいには強敵だった。

「キリもいいし、この辺で切り上げよっか。じゃあ、うん。帰る?」

「え。や、晩ご飯くらいご馳走させてよ。こんなにもお世話になったんだから」



千佳に声を掛けると、先に朝加が口を開いた。

普段なら大歓迎だが、千佳はどうだろうか。

帰るかどうかが訊いたのも、一応、千佳を気遣ったのことだ。

どうする？ と目で問いかけると、千佳は戸惑ったように視線を彷徨わせた。

そのまま朝加とばかり、と目が合い、朝加がにっこり笑う。

それで決まったようだ。

「あ……、じゃあ。ご馳走になります」

千佳がぺこりと頭を下げた。何とも慣れていない仕草に、朝加は微笑む。

千佳がそう言うのなら、由美子としても遠慮することはない。

「なに、朝加ちゃん。ご馳走って、朝加ちゃんが作ってくれるの？」

「面白いと言うね。もはや調理道具がどこにあるかもわからない、

このわたしが作る？」



「胸を張って言うことじゃないと思うんだけどね」

肩を竦める朝加に呆れてしまう。それに対し、千佳は小首を傾げた。

「朝加さんも、料理できないんですか？」

まるでできない千佳が問いかけると、朝加は「うーん」と難しい表情をした。

「いや、できないことはないよ。昔は結構やってたほうじゃないかな。まあ、

でも、そうだね。しばらくやってないから、もつできないかもしれないね……」

朝加は遠い目をして呟く。

彼女の部屋がグチャグチャなのも、自炊をしないのも、仕事が多忙なせいだ。

余暇さえあれば、彼女がキッチンに立つこともあるかもしれない。

朝加ちゃんの料理、一度くらいは食べてみたいなー、と思っていうと、

朝加がスマホを取り出した。

「それで、どうする？ 何食べたい？ なんでも遠慮せずに言ってね」



「？ お店を調べるんですか？」

千佳がスマホを見ながら尋ねる。すると、朝加が苦笑いを浮かべた。

「いや、配達してもらおうと思って。今からお店に行くのは面倒くさいかな……。着替えなきゃいけないし、メイクもしなくちゃいけないし」

朝加は気だるそうに自身の姿を見下ろす。千佳は慌てて、手を振った。

「あ、いえ。配達っていうのを思いつかなかったもので……」

「夕陽ちゃんはやらない？ 夕陽ちゃんも自炊あんまりしないんだよね。」

便利だよ、お金をちよっと多く払っただけで、たいていのおいしいものが家に運ばれてくるんだから」

「たいていのおいしいもの……」

千佳の目がきらきらと輝き始める。千佳は食べることが好きだが、その準備を面倒くさがる傾向がある。



その過程をすっ飛ばせるのだから、彼女に合っているのかもしれないが……。

「朝加ちゃん。あんまりユウに変なこと教えないでよー。」

加減を知らないんだから」

由美子の注意に、千佳はむっとする。苛立たしげな眼を向けてきた。

「あなたね……。今のなに？　あなたはわたしの保護者かなにか？　彼氏面の次は

保護者面？　どっいつ立ち位置でものを言ってるの。あなたのそいつとていっ

本当に嫌い」

「……………」

言われてみれば確かに、同級生に言うつようなことではなかった。

しかし、常にどこか危なっかしく、食欲にはまっすぐ。そんな彼女が時に子供に見えるのは、まあ当然といつか。ただ、そこを正直に言ってもしょうがないので、適当に答えた。



「大人ならまだしも、高校生が配達を頼みまくってたら、ちよっぴーでしょ」  
「……………」

それもそうか、とも思ったのか、千佳は黙り込んだ。

そこに朝加がするりとスマホを差し出す。

「まーまー。大人のわたしが注文するから、今日くらいはね。さ、なに食べたい？

和洋中でも、好きなお店でも。あ、スタンダードにピザっていう手もあるね」

「ピザ……………」

朝加がスイ、スイ、とスマホを操作するたび、千佳のきらきらの目が動く。

それが一層光を放ったのは、「ピザ」という言葉に対してだった。

「ん。ピザにする？　ひとりじゃ頼みづらいし、ちよっぴーいかも。

やすみちゃんはどう？」

「いんじゃない？　あたしも久しぶりに食べたいな」



由美子も、あまりその手のものは頼まない。味を想像して、心が躍った。朝加が手早くサイトにアクセスすると、様々な種類のピザが表示される。

千佳は早速それに釘付けになり、朝加はやさしい声色で説明し始める。

それを聞いているうちに、千佳の目が徐々にぐるぐるしてきた。

どれもこれもおいしそうで、迷っているのだろう。情報量に吞まれている。

「あっ。ちょ、ちよつと佐藤！ あなたも選んで！ みんなで食べるのだから！」

突然、はっとした様子で千佳が顔を上げ、こちらを手招きする。

その動作は、子が親を呼ぶ姿にそっくりだ。

さっき、自分であんなことを言っていたのに。由美子は笑みを隠しながら、

「はいはい」とふたりの元に近付いた。

一生懸命に選ぶ千佳の気持ちに、水を差さない良心は由美子にもある。

「すみません、お手洗い借ります……」



なんとかピザを選び終えたあと、千佳は疲れた様子でトイレに向かった。

朝加は微笑みながら見送ると、由美子に顔を寄せてくる。

「いやー……。夕陽ちゃん、食べ物のことになると本当に真剣だね。

やすみちゃんのパスタもおいしそうに食べていたし、かわいいなあ。

ご飯食べさせなくなる愛らしさがあるよね」

「わかる……。人、も、いるかも、しれないね。知らないけど」

思わず同意しそうになって、慌てて急旋回する。

当然、朝加がそれに気付かないはずもない。おかしそうに笑った。

「やすみちゃんが世話を焼きたがるのも、無理ないかもね。

あれだけ可愛らしいとねえ」

「へ、変なこと言うのやめてくんない……。そ、そんなんじゃないし」

妙な意見に顔が熱くなる。間が悪いことに、千佳が帰ってきて、「どっしたのよ」と首を傾げた。由美子は「なんでもない」と顔を逸らし、手を振った。